藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

サビエル五百歳

歴史上の外国人で日本人が一番よく知っている人はだれかという調査をしたら、どんな結果が出るだろうか？

フランシスコ・サビエルがかなり上位にランクされるのではなかろうか。我々は歴史の時間、サビエルの来日を「イゴヨロシク（一五四九）」と暗記したものだ。

小、中、高校とサビエルに縁の深い山口市で過ごしたのに、私は記念聖堂にも一度も行ったことがなかった。

ところが、クリスチャンの妻の結婚の条件が「教会での結婚式」。支度金がいるわけでもないので喜んでOK。記念聖堂にも何度か行ったが、サビエルについてはほとんど無知。それが今回の巡礼記のお陰で、伝記を読んだり資料を集めたりしてサビエル通になった。

動機は不純であっても、神は聖なるものにして下さると信じて巡礼記を書く。

サビエルが生まれたのは今からちょうど五百年前の一五〇六年。スペイン・ナバラ州の貴族の子としてサビエル城で生まれ、十九歳でパリ大学に留学。二十四歳で哲学助教授となり、富と名誉を兼ね備える高位聖職者を目指す。

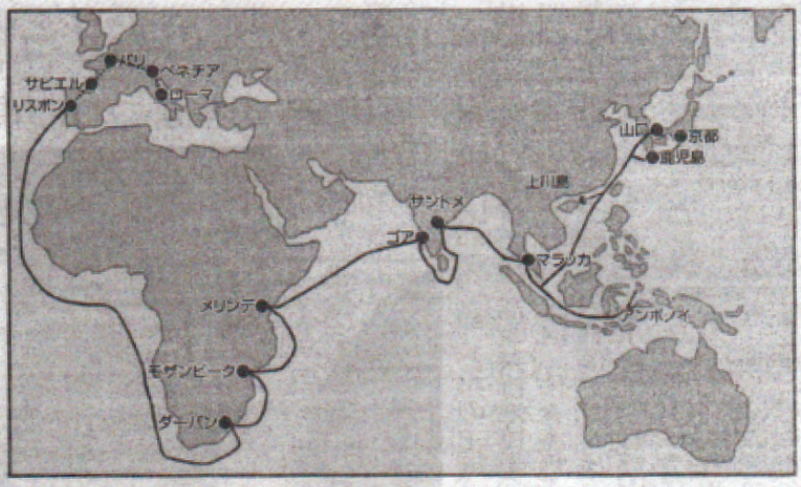
大学寮で同室だったイグナチオ・ロヨラの影響を受けて大回心。二十八歳の時、ロヨラら七人の同志と〝イエズス会〟を創立。東洋宣教のため三十五歳の時、リスボンを出港、一年後にインドに到着。マラッカなどで布教中、日本人ヤジロウと出会い、日本での布教を決意する。

一五四九年に来日。平戸、山口、京都、大分で布教活動をし、七百人が洗礼を受ける。しかし、日本が中国文化の影響を強く受けているのを知り、中国行きを決意して日本を離れる。

翌年（一五五二）中国に向かい、サンチャン島（上川島）に上陸するが、高熱のため倒れ、十二月三日、死去した。

以上がサビエルの簡単な足跡である。

日本に滞在したのはわずか二年間である。それも今のように交通の便がいいわけではなく、リスボンを出て、インドのゴアに到着するまでに一年一カ月もかかる時代に。



サビエルの軌跡（「カトリック生活」6月号から）

サビエル城

今回、サビエル生誕のサビエル城を訪れたが、城は観光名所となっており、サビエルが命をかけて伝えようとした福音、信仰をほとんど感じられなかったのは残念であった。

これはサビエル生誕の地に限ったものではなく、ヨーロッパの各地の立派な聖堂が、過去の文化遺産としての観光名所的存在であり、生きた信仰共同体の存在がほとんど感じられないのと同じである。

ロヨラと一緒に作ったイエズス会の会員は五十年前ごろは約三万五千人と言われていたが、今では二万人を割り込んだと言われる。

今の世の中、キリストの愛の福音が必要なくなったわけではない。逆に日本の最近の事件などを見ても、心が病んでいるとしか表現のしようがない親殺し、子殺しなどが多い。

過去の遺産ではなく、病ある現代社会にこそ、福音を伝えてほしいとサビエルは願っているに違いない。

サビエル五百歳、彼を殺してはならない。

（前山口放送取締役ラジオ局長）